

ざいちのち

まちやむら、そこに住む人びと（=ざいち）の知恵や生き方（=ち）から学び、実践する活動です。

実践型地域研究ニュースレター No. 23 2010年9月

京都大学

生存基盤科学研究ユニット

東南アジア研究所 「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

京都市 保津峡

朽木フィールドステーション

余呉・中河内 2010

朽木 FS 研究員 今北哲也

激しく燃え盛った笹山

山を焼いてるっていう迫力を感じた今夏の中河内だった。8月19日朝。今日も暑くなりそう。師匠の永井邦太郎さんは山を見上げる。お神酒をお供える。鉢巻をはずしながら、私に目の前のササを刈ってくれという。束ねて大麻(オオヌサ)に仕立て右左右と御祓いをし、祝詞をあげる。皆も拝む。

午前10時すぎ、永井さんの指示で、伐開した山の上端に近い風下(北側)から火が着けられる。パチパチとササの軸がはぜる。濃い煙が立ち昇り、炎が太くうねっていく。着火まもなく、防火帯に張っておいた古トタンの壁めがけて炎が這い上がって行くのがみえた。前日の準備が効いた、とほっとする。着火点から南側へ、上端から山裾へ火が延びる。防火帯で待ち構える。杉葉で叩き、川水をポンプアップした水溜め桶からバケツリレーが始まる。人海戦術のおかげで火勢はおおよそ思惑通りに進んでくれた。ササは半端じゃない。煽られ、煙を浴び、五体は他人様のような。現場を降りて振り返る。きれいに焼けた墨色の山姿にいつとき気も疲れも抜けてしまった。

今回、摺墨、中河内から男衆の加勢をもらった。余呉のおなごし(女子衆)や滋賀、京都方面から合



写真1: 勢いが出る炎・余呉中河内(Tomo Riva氏撮影)



写真2: 防火帯から延焼を防ぐバケツリレー(Tomo Riva氏撮影)

わせて40余名が北国街道の山に集うという熱い日になった。《火野山ひろば》にとっても節目の火入れになりそうだ。

燃え草と焼け土

現場に埋められた計測器は、地表下5cmで110℃(器具の計測限界値=110℃・吉村文彦氏測定)、15cmで30℃。イブキザサの根の張り方(深さ)、どの程度火に強いか(温度)などを確かめていないが、興味深い数字である。昔の人の火入れの工夫、技のわけがあれこれ想像できそうだ。

山焼きで燃やす柴、木、草を指して朽木ではモエクサ(燃え草)と呼んでいる。柴木であってもモエクサだ。ホトラ(肥草)山慣行~火入れによって田を養う草山管理~が続いてきたなかで生まれた言葉のようにおもえる。火入れサイクルをたずねた時「毎年刈とつたら短いもん(草丈・葉張り)になってモエクサものうて(無い)ろくに燃えやせん。あい(間)おいて2年毎に焼いとつたわな。(旧朽木村小川・久保ふじさんの聞き書き)」

去年、今年と続けて火入れを行った余呉・中之郷(スキー場)は、カヤが広がる草山である。モエクサを補うため手間かけて杉枝を散らした師匠の永井さんは言う。「去年、今年と続いてやしな。(燃える)草も少ないし。刈ってから日もたつとつて(雨で火入れを延期)、草やからへたつてもたんやわな。山焼きにはちょっと無理があったな。」

燃え草の嵩と質で(土の)焼け具合に差が出るのは余呉の4年の火入れで実感できるようになった。笹山の焼け跡からは、2ヶ月たつても雑草は目立たずササはほとんど出てきていない。かぶらばかりが目に入る。いつときはかぶらが雑草やカヤにまぎれた中之郷と対照的だ。2年目3年目の若い草山や笹山で作物や草の出来具合に注意していきたい。

「まともな人間のする仕事とちやう」-京北最後の筏師①-

亀岡 FS 研究員 河原林洋

今年度から京都市京北町在住の元筏師・栗山季夫氏（写真 1）の話を聞き取っている。

栗山氏は、京都市京北町魚ヶ淵在住、大正 14 年生まれ、85 歳の古老である。16～19 歳までの二冬、筏流しに従事し、京北・上桂川（写真 2）の筏流しを知る最後の筏師である。当時は 15、16 歳で筏師になることはなかったが、戦争の影響で筏流しを担うの



写真 1: 栗山季夫氏

は、老人か少年しかなく、16 歳で筏師になれたという。二冬しか筏師を経験していないためか、筏師と呼ばれることに違和感があるそうだ。戦後、40 歳代まで山仕事をする柚（そうま）の仕事をし、滋賀県・朽木で年 3 ヶ月計 4 回ほど柚の仕事に従事した。

京北の筏は、保津の筏とは大きな違いがある。それは、筏組の方法である。保津の筏は、カン・藤蔓・樫で組まれるが、京北の筏は、木材の両端に穴をあけ、ネソ^[1]（写真 3）で木材同士をくくりながら組まれる。保津の筏が「カン筏」と呼ばれるのに対し、京北の筏は、学術的には「メガチ筏」と呼ばれる。ここでは、筏の組み方やそれらの違いは紙面の都合上割愛する。

京北の筏流しも、保津と同じく、9 月 15 日から翌年 5 月 15 日までである。9 月 15 日から元旦までは、主に「川作」といって、筏の航路確保のため、川の工事をしてきた。山国・下村、魚ヶ淵、下宇津



写真 2: 京北町の上桂川の風景

各村の筏師約 10 名ずつ、計約 30 名ほどが作業にあたった。極寒の川の中、足袋と草鞋だけの作業、想像を絶するものであったという。

ここで栗山氏の筏仕事の一を紹介する。筏流しは主に京北町・上黒田の灰屋口から日吉町上世木（今は日吉ダムの完成により現存しない）までの区間である。

1 日目は、灰屋口から魚ヶ淵まで。周山駅から下黒田までバスが運行するまでは、朝 3 時に起きて、魚ヶ淵から徒歩で 3 時間かけて灰屋口（上桂川と灰屋川の合流点付近）まで向かう。灰屋口に係留されている筏を点検し、魚ヶ淵まで下す。一日仕事のため、昼食は、道中筏の上で、握り飯や納豆餅を食べていた。

2 日目は、魚ヶ淵から上世木まで。魚ヶ淵の上流、山国の下村に堰があり、当番の筏師が堰を切って鉄砲水を流し、下の魚ヶ淵の筏師に堰を切ったことを徒歩で連絡する。知らせを聞いた筏師は筏を下す準備をし、鉄砲水を待って上世木まで筏を下す。この堰を切る担当を「とめぬきさん」と呼び、筏師が輪番制で請け負っていた。

筏流しの服装は、筏流しの季節が秋から春にかけてと言っても、決して厚着せず、常にシャツに半纏であった。なぜならば、厚着は溺死する危険性が高まるためであった。栗山氏は、それでもあまり寒さを感じなかったというが、それが当時は当たり前のことだったからであろう。

栗山氏は、筏の仕事は「まともな人間のする仕事とちやう」という。しかし、極寒の冬、川作をし、筏を下してきたかつての筏師たちの暮らしが、京都・大坂の発展を支えてきたのも事実である。その記憶は、残された私たちの「宝」であると思う。今後も、栗山氏を通して、その記憶を掘り起こしていきたい。



写真 3: 栗山氏が保管していた「ネソ」

脚注

[1] マンサクの木（指の太さくらい）を火であぶって捻ったもの。水に強く、腐りにくく、2～3 年は保管できた。水で戻して柔らかくして使用する。

守山フィールドステーション

「メガネとしての国見、漸近線としての故郷」 滋賀県立大学 地域づくり教育研究センター 特定研究員 近藤紀章

日本、とりわけ琵琶湖を中心とする地域を考える上で、今まさに、守山が問われている。

列島の各地に大きな裂け目があると考えている。北アジアから東南アジアへと通じる南北の流れを、中国を源に、朝鮮、瀬戸内海を経て、京都、東京へと通じる東西の流れが引き裂いている。ひとまず、この裂け目は琵琶湖をとりまく地域にも浮かび上がっている、としておく。

僕は、これまで湖北地域の中山間地域での地域づくりに関わってきた。今、はやりの都市農村交流や移住であるが、「何か」にあがらない、自問自答を繰り返してきた。

そもそも、地域づくりには、「いくつもの地域像」を描き出すために、多様な手法や考え方が求められている。にもかかわらず、多くの地域で、京都や大阪、名古屋にいかにも近く、少しの不便や手間を除けば、暮らしは変わらないことが強調、共有される。そして、ここは自然も暮らしも豊かだ、空き家や耕作放棄地などの地域資源を活用しよう、と田舎を体験するイベントへと展開される。

「やらないよりもやったほうがよい」とする地域再生や地域活性化において、実践は一つに結集されなければならない。それが事業の仕様であればなおさらに。だからこそ、議論の過程で、前者が中心に対する周縁の同質化、均質化、後者が逆説による差異化とスケープゴートの生成、つまるところ、排除の構造がはたらく。この結果、「いくつもの湖北」を描き出すためには、福井や岐阜、日本海とのつながりを語っていく必要がある、それは守山が鍵を握っている、と主張するしかできなかった。

そんな折り、「コンピューターで国見ができるか」^[1]という一節を目にする。なるほど、守山を知らない自覚から、実際にこの目で確かめたくて、三上山に登った。

割岩をなんとか通り抜け、はいつくばるようにし

て登った眼前に広がる光景を見たとき、「何か」のしっぽをつかんだ。

守山に来るとある種の勘がはたらく。僕は「いつもすみません、ちょっと通して下さい」という気持ちで歩いている。それは「なんや、あいつ、また来とるな」という人なのか神様なのかわからないが、とにかく見えない視線を感じるからだ。だが、その感覚は僕を排除するものではなく、その時その時であるが、むしろ居場所を与えてくれる。友達の実家に遊びに行って、玄関や廊下を歩く感覚に近い。おそらく、これは、守山が交通の要衝に位置する農村という歴史的経緯に培われて醸し出されるのだろう。しかし、こういう地霊や路地の醸し出す言葉にできない空気感が、守山を守山たらしめているのだ、と気づいた。

一方で、守山の駅前には、高層マンションがいくつも建っており、文字通り、東西の流れによって、現在進行形で引き裂かれている。しかし、これは路地の作法を近代的に都合良く解釈し、うまくシステムとして活用したものだ。だが、眼下の古い集落は守山であろうとその形態をとどめようと、市街化、均質化の波と格闘しているように見える。逆に言うと、あのようなビルの形でしか、うまく活用することができないのだ。

だからこそ、今、守山が問われている。同時に、よそ者の僕は、故郷でない守山で何ができるのか、も突きつけられる。僕は守山に通って4年になるが、おかしなことに居場所があり、いろいろな場所で人と出会ってきた。だから、自らが器となって、体験やできごとを語り継ぐために、このまま通ってみようと思う。そして、10年たってから同じように振り返ってみようと考えている。

と、かつこいいことを言っているが、要は守山でみんなと飲むために通い続けるぞ、という宣言である。けれど、こういうどうしようもない研究や地域づくりの方法があつていいのではないだろうか。

脚注

[1]荒俣宏,小松和彦(1997):鬼から聞いた遷都の秘訣—地震・風水・ネットワーク,pp162-168,工作舎



写真1: 百聞は一見にしかず。デジタルでも国見は難しい証拠でもある。

■第27回 定例研究会

1. 日時：平成22年9月24日（金）16:00～19:00
2. 場所：守山FS（滋賀県守山市梅田町12-32）
3. 発表者1：今北哲也（朽木FS 研究員）

発表内容：「余呉の火入れと《くらしの森》」

発表者2：鈴木玲治（生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所）

発表内容：「焼畑における耕起の意義 -日本と東南アジアの比較から-」

*参加希望者は、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室（担当：鈴木 rsuzuki@cseas.kyoto-u.ac.jp）までご連絡ください。

ラオス活動報告4 集落文化資料館の完成式

生存基盤科学研究ユニット 矢嶋吉司

昨年（2009年）12月に始まったタチャンパ村の集落文化資料館の工事は、2010年3月28日にすべての工事が終わりました。当初、4月のラオス新年に合わせて完成式を行う予定でしたが延期され、6月18日に開催されました。ラオス国立大学農学部のカウンターパートたちも、農作業で忙しい村人たちを手伝って、会場設営や式の段取り準備などに活躍してくれました。



写真1：タチャンパ村集落文化資料館全景。ベランダの丸っぽいひしは、黒タイ族の伝統を残している。

完成式には、サイタニー郡役所の文化局の責任者などの役人、学部長をはじめとする農学部関係者、近隣の村の関係者、トヨタ財団の担当者などが出席し

ました。雨季にもかかわらず強い日差しの中、村長など村役に加え多数の村人たちも出席し、文化資料館の完成を祝いました。来賓のあいさつ、村長による村の歴史と資料館建設の経過の報告、テープカットに加え、資料館2階に展示されていた農具や機織りなど村の伝統的な道具の見学、来賓による竹の記念植樹、資料館の成功や出席者の幸運や健康を祈って手首に木綿の糸を巻くパーシーの儀式が行われました。そのあと、出席者にお祝いの昼食と飲み物が振る舞われました。地元の音楽バンドの演奏や伝統音楽ラムの歌と郡の文化局が手配してくれた民族衣装を着た子どもたちの踊りなどが夕方まで続きました。

開会式での村長が報告した資料館建設の経過を



写真2：開会式のバナーの前の記念写真。

紹介しましょう。

「タチャンパ村では、文化資料館を通して伝統的な生活、農具、衣装など村の伝統文化を保存し、次代をになう子供たちに伝えていきます。資料館の2階には、ベランダ、子供図書室、道具や民具を展示する資料室が、1階には、集会や収穫祭、文化祭など多目的に利用するための村のオフィスが、それぞれ設けられています。これらの計画は、文化局など郡役所や農学部の助言を受けました。

工事費として、トヨタ財団の助成金6,000米ドルに村が負担した648米ドルが計上され、工事が開始されました。それに加え、1階のコンクリートの「犬走り」のために190米ドル、建物完成後の電気敷設工事費として320米ドルを村が追加負担しました。さらに、工事期間中に、計5回、延151人の村人が労働奉仕（約380米ドル相当）しました。以上、総工費は7,538米ドルになり、村の負担は1,538米ドル、2割となりました。ようやく、建物は完成しましたが、本棚、机といす、資料陳列棚、本雑誌など不足しています。これらを充実するための支援を今後も期待します。」

以上、我々の予想を上回る村人の参加が得られたこと、また、資料館に村の集会場や村役場事務所が併設されたことなどから、建物の利用や維持管理に村が積極的にかかわることが期待され、一安心しました。今後の課題として、道具・民具の収集と保存、村の小学校との協力、伝統文化の保存活動など、村人たちに具体的な文化資料館の運営や活用が求められています。我々も、できる限り一緒に活動を進めて行きたいと思います。



写真3：パーシーの儀式。お祈りを唱えながら白い綿糸を手首に巻く。村人たちが、文化資料館の成功に加え、旅の安全、人生の成功を祈ってくれた。